

女性協働者たちの無教会運動 ——皆川とし子の煩悶・求道と〈信仰＝研究〉系キリスト教——

赤江達也

1 はじめに——無教会と女性：1920年代という転換点

現在も読まれている岩波文庫の『新約聖書 福音書』（1963）は、無教会伝道者の塚本虎二（1885-1973）による翻訳である。その「あとがき」に「補助者は皆川とし子。彼女は命がけで引き受けた」という一節がある（塚本訳1963：414）。

皆川とし子（1906-1943）は、1943（昭和18）年に若くして病没するまで、塚本虎二の助手を務めた人物である。塚本の聖書講義の筆記、塚本の雑誌『聖書知識』（1930-1963）の編集に加え、新約聖書翻訳や福音書異同一覧の作成のような学術的な仕事にも深く関与している¹。戦中に新約聖書翻訳に従事していた皆川とし子とは、どのような人物であったのか。その生涯を通して無教会と女性について考えてみたい²。

無教会キリスト教は、著述家の内村鑑三（1861-1930）が1900（明治33）年頃に立ちあげた宗教思想運動である。内村は雑誌『聖書之研究』（1900-1930）を創刊し、東京の新宿付近（角筈、のち柏木）で聖書講義（聖書研究会）を主宰した。1910年代までは、聖書講義の聴衆は数十名、雑誌の発行部数は2000部前後であったが、1920年代にかけて、聴衆は数百人規模、雑誌は3000-4000部へと拡大していく。1920年代には、塚本虎二と畔上賢造が内村の助手を務め、塚本が聖書講義、畔上が雑誌編集を中心に内村の伝道事業を助けた。

1920年代には、無教会運動のなかで女性信徒が急増している。これは明らかに高等教育を受けた女子学生の増加と関連している³。再臨運動（1918-1919）以降における無教会運動は、

¹ 塚本虎二の新約聖書翻訳事業については、赤江達也（2023a）で論じた。塚本虎二に関する主な研究としては、関根正雄・前田護郎・斎藤茂編（1959）、藤田若雄編（1977a、1977b）、無教会史研究会編（1991、1993、1995、2002）、高木謙次（2009）などがある。

² 皆川とし子を主題的に扱った研究は、おそらく存在していない。女性無教会信徒の研究としては、高木謙次（2009：81-83）による塚本の協力者の女性10数名への注目、今高義也（2020：第10章）による陶山節子の聞き取り、矢田部千佳子（2020、2024）などがある。近代日本のキリスト教と女性については、小椋山ルイ（2023）、中本かほる（2018）、川村清志（2011）、川又俊則（2002、2003、2006）などがある。

³ 1920年代の無教会運動における女性信徒については、カルロ・カルダローラ（1971=1978：178）、赤江達也（2013：148-149）を参照。1920年代の女性の教育については、小山静子（2023）を参照した。

東京の都市部を中心に「教養主義」的な新中間層に支持されていく。そのなかで、それ以前からの婦人・子女に加えて、中等・高等教育を受けた女性たちが内村の聖書研究会に参加してくる。そのうちの一人が皆川とし子である。

この時期の女性信徒の増加については、大河原礼三（1977）が助手の塚本虎二の人气によって説明しているが、そこには奇妙な議論がふくまれている。大河原は塚本の信仰を「母性的宗教性」と捉え、「「女のような」性格で「愛」を説く塚本は婦人から好まれ」ており、「「近代人」的傾向と「女のような」性格によってすでに内村集会の中に多くのファンを獲得していた」と論じている（大河原1977：103、130-131）。「女のような」性格の塚本が、女性（婦人・女学生）の「ファン」に支持されていた点に、塚本の「母性的」信仰の問題があらわれている、というのである⁴。

無教会第三世代である大河原の議論では、無教会は「男性的」なキリスト教であるという規範的な理解が前提とされている。大河原も参照するように、最晩年（1930年）の内村鑑三は病床での私的な会話で、塚本を慕う「若き女」たちを批判することがあった⁵。その例外的な内村の語りも、1970年代に大河原によって継承され、反復されている。こうした議論は、無教会運動において女性信徒の位置づけが問題となってきたことを示している。

そこで本論文では、皆川とし子の生涯をたどりながら、無教会運動における女性協働者⁶について考察する（表1）⁷。とくに皆川が煩悶と求道のなかで「命がけで」従事した新約聖書の翻訳・研究に注目し、無教会キリスト教における〈信仰〉と〈研究〉の密接な関係を明らかにしたい⁸。それにより、男女の協働者や信徒たちによって集团的に展開されていた無教会の研究＝出版活動と、女性協働者たちの困難がみえてくるはずである。

⁴ 大河原礼三の議論では、内村鑑三の信仰は「父性的原理」の確立（「母性的原理」の克服）によって特徴づけられる（大河原1977：132）。こうした塚本批判が、母性や女性への否定的評価とともに、「教養主義」批判と結びつく点も重要である（大河原1977：101）。こうしたジェンダーに関する用語法は、藤田若雄を中心とする共同研究のなかでも共有されていた（藤田編1977a、1977b）。たとえば同書では、原島圭二も「父性的（男性的）／母性的」という対比を「神の義」と「愛」に重ね、塚本虎二の信仰を後者に位置づけている（原島1977：54-60）。なお、大河原礼三による塚本虎二論の検討は、無教会キリスト教と戦争という文脈でも重要な課題である。筆者による塚本虎二論の試みとしては、赤江達也（2017b、2019、2020a、2020b、2021、2022a、2023a、2023bなど）を参照されたい。

⁵ 大河原は、内村鑑三による「若き女」批判をふまえており、典拠として石原兵永（1972：259-260）を参照している（大河原1977：103）。石原兵永は塚本の後任の助手で、塚本に批判的であった。なお、内村鑑三は、女性の地位や役割に関して保守的なところがあったが（マリノズ1998＝2005：91、赤江2013：126）、大河原が参照している「若き女」批判は、死の床でなされた例外的な発言である（斎藤2018：671）。内村の最期については、安芸基雄（1997）、斎藤宗次郎（2018）を参照。

⁶ 本論文では、無教会伝道の集団性を捉えるために「協働者」概念を設定する。この概念は、無教会伝道者の助手だけでなく、伝道事業を実務的かつ日常的に担っている信徒たちも含むものである。

⁷ 本論文の主な資料は、「皆川とし子記念号」と銘打たれた雑誌『聖書知識』第160号（1943年4月）である。同号の出典表記については、参考文献欄の注記を参照。

⁸ 女学生の憂鬱、女子青年と煩悶に関する研究としては、明治後期（1900年代前後）を主な検討対象とする平石典子（2012）、和崎光太郎（2017）などがある。

表1 皆川とし子年譜⁹

西暦	和暦	月	日	満年齢	数え年	事項
1906	明治39	5	14	0	1	北海道函館市に生れる
1912	明治45	4		6	8	日本橋城東尋常小学校に入学（日本橋区、現在の中央区）（1918年3月卒業）
1918	大正7	4		10	13	東京府立第一高等女学校に入学（芝区三田、現在の港区）（1923年3月卒業）
1923	大正12	4		16	19	女子英学塾に入学（麹町区五番町、現在の千代田区）（1927年3月卒業）
1923	大正12	9	1	17	19	関東大震災で被災 呉服橋を渡って家族と宮城前に避難する まもなく牛込教会に通いはじめる（牛込区払方町、現在の新宿区）
1925	大正14	12		19	21	田島進牧師から洗礼を受ける
1926	大正15			20	22	日本YWCA夏期修養会（静岡県御殿場）に参加 講師の塚本虎二に出会う
1926	大正15	10		20	22	内村鑑三の聖書研究会に入会（教会を離れる） まもなく聖書研究会での塚本虎二の講義筆記を手伝いはじめる
1927	昭和2	4		20	23	東京府立第六高等女学校に就職 英語を教える
1927	昭和2			21	23	聖書ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などを学びはじめる
1928	昭和3	3		21	24	東京府立第六高等女学校を退職
1928	昭和3	4		21	24	創設された女子英学塾高等科に入学（1930年3月卒業）
1929	昭和4	10	20	23	25	塚本虎二、単独での聖書講演会を開始
1929	昭和4	11	3	23	25	塚本虎二、皆川との結婚を内村に相談し反対される
1930	昭和5	1	1	23	26	塚本虎二『聖書知識』を創刊
1930	昭和5	4		23	26	女子英学塾に就職 英語教育と宗教指導に携わる 塚本虎二の新約聖書翻訳事業に従事（1931年1月、翻訳連載開始）
1931	昭和6					女子英学塾、北多摩郡小平村（現在の小平市）の新校舎に移転
1933	昭和8					女子英学塾から津田英学塾と改称
1936	昭和11	3	20	29	31	父・但一、死去
1936	昭和11	10		30	31	津田英学塾を辞職
1942	昭和17			36	38	夏頃から健康を害する
1943	昭和18	2		36	38	2月22-23日頃、発病
1943	昭和18	3	1	36	38	午後10時40分、死去
1943	昭和18	3	4			告別式、会場は基督教女子青年会講堂（神田区駿河台、現在の千代田区）

2 女子青年の煩悶と求道——教会、YWCA、無教会

女子英学塾から教会へ——関東大震災という契機

皆川とし子は、1906（明治39）年5月14日、父・皆川但一の長女として生まれる。とし子の出生地は北海道函館市であったが、その後、皆川家は東京に転居している。1912（明治45）年、皆川とし子は日本橋城東尋常小学校に入学し、1918年（大正7）には東京府立第一高等女学校に進学する。

父親の但一は、「子供にどこか故障が起ると矢も楯もたまらなく」なって医師を呼ぶほど、とし子や妹をかわいがった（皆川1938：112）。そのたびに皆川家を訪れた医師が、内村鑑三門下の植木良佐（1894-1936）であった。キリスト教とのかかわりが薄かった皆川家にとって、植木は実際に知っているただ一人のクリスチャンであったという¹⁰。

⁹ この年譜は、清水三千恵（1943）などをもとに、赤江が作成した。

¹⁰ 皆川とし子は、1926年に内村の集会に参加した際に、植木良佐に再会して驚いたという（皆川1938：111、113）。植木良佐については本論文の注39を参照。なお、皆川とし子の母親は、1930年代後半頃に、塚本の集会に出席するようになっている（塚本1943〔弔辞〕：19）。

1923（大正12）年、皆川は女子英学塾に入学する。女子英学塾（後の津田英学塾）は、津田梅子が創設したキリスト教系の専門学校で、当時は麹町区五番町（現在の千代田区）に位置していた¹¹。この学校で、皆川はキリスト教の雰囲気親しむようになる。

その年の9月1日、関東大震災が起こる。皆川は「猛火に追はれながら」呉服橋を渡って家族とともに「宮城前」に避難する。「この地震と猛火と飢餓と恐怖との中で経験された事」が「信仰への導火線」となる。この被災体験と、女子英学塾の「基督教的雰囲気」があいまって、皆川はまもなく牛込拂方町の牛込教会に通いはじめる。1925（大正14）年12月には、田島進牧師から洗礼を受けている（清水1943：14）。

ところで、関東大震災は、塚本虎二にとっても人生の転機であった。1919（大正8）年に農商務省の官僚を辞した塚本は、聖書の研究に専念していた。1921（大正10）年には、斎藤園子と結婚する¹²。妻園子と義母は、植村正久（1858-1925）が牧師を務める富士見町教会の信徒であった。そのため、塚本は内村鑑三に師事しつつも、植村正久牧師と交流を持つようになっていた。その妻が関東大震災で亡くなるのである。二人の幼い子供を抱えた塚本は、出発直前であったドイツ留学をとりやめて、内村の助手として働きはじめる¹³。

関東大震災の時には、皆川とし子と塚本虎二はまだ知り合っていない。ただ、関東大震災での被災の体験が信仰生活の転機になったという点では共通していた。

塚本虎二との出会い——YWCAの夏期修養会

皆川とし子は、1926年（大正15）に日本基督教女子青年会（日本YWCA）の夏期修養会で塚本虎二に出会っている。7月から8月にかけて、静岡県御殿場の富士岡荘で日本YWCAの第21回全国夏期修養会が開催される。その講師の一人として、無教会の塚本虎二が招かれていた。そして、皆川とし子は田島牧師の勧めで、この修養会に参加していた。

第21回夏期修養会は、一般婦人・専門学校生・女学生・有職婦人の4回に分けて開催されている。参加者は計550名ほどで、多数の受洗決心者が出た¹⁴。皆川が参加した専門学校生の部は、7月中旬の一週間で、講師による説教・講義だけでなく、講師への相談や交流の時間も設けられた。諸教派の講師のなかでも、無教会の塚本の人気は高かった¹⁵。

¹¹ 女子英学塾は、1933（昭和8）年に「津田英学塾」と改称している。津田梅子と女子英学塾（津田英学塾）については、古川安（2022）、星野あい（1990）を参照した。

¹² 妻園子の父親は、英語学者の斎藤秀三郎である（大村1960、1964）。

¹³ 内村によれば、助手の塚本への俸給は、当初200円、後に250円、内村が登壇しない時期は300円であり、夏期には保養手当を付けたという（斎藤2018：674）。

¹⁴ 参加者約550名の内訳は、一般婦人の部43名、専門学部141名、女学部246名、有職婦人部118名であった。日本YWCAの夏期修養会については、日本YWCA100年史編纂委員会編（2005a：15、19）、中本かほる（2018）を参照。第21回夏期修養会の開催形態や参加者数については、日本YWCA100年史編纂委員会編（2005b：66）、および日本基督教聯盟編（1926：69）を参照した。

¹⁵ 塚本は翌1927年にも日本YWCAの第22回夏期修養会（専門学生の部）で講師を務めているが、諸教派からの4人の講師のうち、塚本に学ぼうとする参加者がもっとも多かったという（内村1927→1983：215）。

皆川は、講師の塚本を訪れて、みずからの信仰と救いに対する疑いや不安を訴えた。かつて教会の牧師から「キリストの十字架を信ずれば救はる」と教えられ、そう信じて、二、三年前に受洗した。ところが、今回の修養会に参加して「周囲の人達の熱烈なる祈禱と感激に燃ゆる感話」にふれて不安に陥った、というのである。

このときの皆川とのやりとりについて、塚本は修養会の後に、内村の雑誌『聖書之研究』に「神の国は受くべきものなり」と題する文章を寄せている。この時点では、塚本は皆川の名前を憶えておらず¹⁶、文中でも皆川の名前は挙げていないのだが、皆川には自分のことだとわかったはずである。皆川は涙を浮かべて、塚本にこう訴えた。

「先生、これでいいんでせうか、大丈夫でせうか」と。彼女の臉には涙さへ光つて居つた。私は慰めて言うた「大丈夫です、十字架を信じて居れば屹度救はれます、之を信じて居れば、屹度救はれるとの信仰を動かさずに居れば、屹度救はれます」と。／と見る、うれひの雨は忽ち霽れて、富士の優さしい姿はほほ笑んだ。（塚本1926：39）

自分が救われているだろうか、と救済に関する不安を訴える皆川に対して、塚本は「十字架を信じて居れば屹度救はれます」とくりかえした。塚本への相談を通じて、皆川の不安はひとまずは解消されたようである。

実際、修養会後の皆川は「始めて「信仰のみ」の信仰を得られ、嬉しくて嬉しくて何も手につかない程」であった（清水1943：14）。このできごとを、塚本は皆川の「回心」と呼んでいる（塚本1943〔弔辞〕：17）。だが、それは、皆川にとってさらなる求道のはじまりであった¹⁷。

女子青年たちの回心——無教会伝道者・塚本虎二の誕生

夏期修養会での皆川との会話は、塚本の信仰生活にとっても転機となる。皆川の後ろ姿を見送りながら、塚本は「果して彼女はそれで屹度救はれるであらうか」という考えに沈んでいた。そのとき、塚本の脳裏に、イエスの言葉がひらめく。

誠に汝らに告ぐ、凡そ^{をさなご}幼児の如くに神の国をうくる者ならずば、之に入ること能はず。
（マタイ18:3）

この聖書の一節とともに、塚本の心に「旭日が照り出でた」。それまで「二十年聖書を読み続けて」きたが、この箇所「うくる」という一節は「その姿を隠して居た」。そして、このとき「始めてこの句に気付いた」というのである（塚本1926：40）。

¹⁶ 塚本は後に、「当時〔修養会の時点で〕は名も記憶しなかつたが、これが皆川とし子さんであつた」と記している（塚本1943〔弔辞〕：17）。

¹⁷ 日本のキリスト教界には、未受洗者を「^{きゅうどうしや}求道者」と呼ぶ慣習的用法があるが、ここでは「求道」を明治末期から大正期にかけて活発化する宗教的・精神的探究の意味で用いている（赤江2021）。

この「うくる」の発見は、塚本にとって「信仰のみ」の信仰の発見であった。「神の国は受くべきものなり」というタイトルは、そのことを意味している。

神の国に入る唯一絶対の条件はただ受くことである。これ以外に何等の条件はない。資格の制限は無い。美はしき道徳も、熱心なる祈祷も、聖書知識も必要ではない。また人生の苦痛の経験も必要では無い。勿論罪の苦^にがき経験を必要としない。必要なるは信受の心である。(塚本1926: 40)

「神の国」に入るための条件は、資格、道徳、熱心な祈祷、聖書の知識、人生の苦痛の経験などではなく、「信受の心」だけである。「資格の制限は無い」というように、それはプロテスタンティズムの徹底としての「無教会主義」の再発見でもあった。その一方で、この引用中の「聖書知識も必要ではない」という一節は、4年後に塚本が創刊する雑誌タイトルが『聖書知識』であることを考えると興味深い。

塚本は前年から、無教会主義者としての自覚を深めていた。1925(大正14)年1月8日、亡き妻の師であった植村正久が亡くなる。その時期に、ある神学生(おそらく植村が校長を務めた東京神学社の学生)が「日本的キリスト教」¹⁸を否定するのを聞いて信仰の相違を感じた塚本は、「教会」との関係を解消し、「無教会主義」の立場を自覚的に選択する。さらにその翌年の皆川との出会いが「信仰の転換期」となる。このようにして、塚本虎二の伝道者としての生涯は、皆川とし子の信仰生活と「分離し難きもの」となっていく¹⁹。

塚本にとって、皆川の回心は、大正期に生じていた集合的な現象の一端でもあった。女子青年たちの「多くの純なる魂が神へと転回する偉大なるまた神聖なる「観物」」を目撃したことで、塚本は「信仰のみ」の信仰を確信するようになる²⁰。塚本は女子青年たちから信仰について学んでいる。そして、彼女らの真摯な求道と信仰に後押しされるようにして、学究的な聖書研究者であった塚本は、無教会伝道者へと変貌していくのである。

¹⁸ 内村鑑三は1920年から「日本的キリスト教」を唱えていた(赤江2022b)。塚本虎二をふくめ、無教会第二世代の主要な伝道者・知識人が、「無教会主義」を「日本的キリスト教」として理解し、さらに展開していくことになる(赤江2020b)。

¹⁹ 「不思議なことに、彼女〔皆川〕に取り回心となつたこの小さな出来事は私自身に取つてもまた信仰の転換期となつた。〔……〕前年〔1925年〕あたりから信仰の相違に気付いて教会との関係を断つた私は、この出来事を契機として純無教会的信仰に入った。斯くして彼女の回心は私の信仰生活と分離し難きものとなつた」(塚本1943〔甲辞〕: 17)。その後、1928年には、塚本は「無教会主義」の立場から「教会主義」を厳しく批判する論文を毎月のように『聖書之研究』に発表している。塚本は内村以上に過激な「無教会主義者」となっており、この点でも内村と塚本の間には緊張関係が存在していた(赤江2017b)。

²⁰ 「この年〔1926年〕私は、彼女〔皆川〕を魁として多くの純なる魂が神へと転回する偉大なるまた神聖なる「観物」を見て、たとひ全宇宙を疑ひても「信仰のみ」の信仰を疑ひ得なくなつた」(塚本1943〔甲辞〕: 17)。

聖書の勉強——「ギリシャ語の組」などの勉強会・講習会

夏期修養会の後、同年10月には、皆川はそれまでの所属教会を離れて、内村鑑三の「柏木聖書研究会」に出席している。「純一なる彼女は直ちに教会を脱して内村先生の聖書研究会に入会し」、「まつしぐらに信仰の一本道を歩いて」いく（塚本1943〔弔辞〕：17）。

柏木聖書研究会への入会からまもなく、皆川は、塚本の聖書講義を筆記して助けるようになる²¹。塚本は内村の助手であり、皆川はいわば助手の助手であった。ただし、皆川の働きは非公式のものであり、内村は明確には認識していなかったようである。

1927（昭和2）年3月、優秀な成績で津田英学塾を卒業すると、東京府立第六高等女学校に勤務して英語を教える。そのころから、聖書の勉強のために聖書ギリシャ語（コイネー）を学び、さらにヘブライ語、ドイツ語などを学んでいる²²。さらに翌年には、第六高等女学校を退職して、創設されたばかりの女子英学塾の高等科に入学し、二年間学んでいる。

ギリシャ語などを教えたのは、塚本虎二であった。1925年9月、塚本は内村門下の青年たちの希望に応え、内村の許可を得て「ギリシャ語聖書研究会」、通称「ギリシャ語の組」を開始する²³。これ以降、無教会では聖書を原語で読むことが盛んになる。女性信徒たちの有志も「ギリシャ語の組」に参加した。なかでも皆川は、その「語学的天才」によってギリシャ語を習得していった（塚本1943〔弔辞〕：18）。

無教会では、ほかにもさまざまな勉強会・講習会が開催されていた。皆川は「御家族方の寛大と御理解によつて〔……〕散歩会〔、〕二三人会、五十人会、第一会、旧約聖書研究会、聖書勉強会、軽井沢や九州阿蘇に行はれた講習会等に熱心に」出席した（清水1943：15）。二三人会と五十人会は、塚本門下の婦人たちによる聖書の勉強会である（斎藤1959：329）。当時、女性が学習を継続するには、家族の理解が必要であったが、皆川の家族や周囲の呼びとは、皆川の希望を尊重し支援した²⁴。津田英学塾長の星野あいや皆川の父親は、優秀で勤勉な皆川に、外国勉学（留学）や高等教員受験を勧めたという。

3 塚本虎二と皆川とし子の結婚問題——1929-1930

「生涯を支配した所の問題」

皆川とし子の友人である清水三千恵によると、1929（昭和4）年10月頃に、皆川の「生涯

²¹ 「彼女は内村鑑三先生の聖書研究会に入会した後、間もなく私がそこでしてゐた講義を筆記してくれることになった」（塚本1943〔弔辞〕：18）

²² 「とし子様は昭和二年以来ギリシャ語を、又ヘブル語、独逸語などを学ばれた」（清水1943：15）。

²³ 塚本は「ギリシャ語の組」をその後も継続し、1925年から1960年までのあいだに400人以上にギリシャ語を教えている（斎藤1959：325-329）。

²⁴ 皆川家について、塚本は次のように述べている。「御家庭は基督教ではないが、稀に見る立派な朗かな家庭で、私の目から見ても徹底に過ぎると思はれる彼女の歩きぶりに対し完全なる同情と理解を以て自由行動を許されてゐた」（塚本1943〔弔辞〕：19）。

を支配した所の問題」が生じている²⁵。これは、塚本との結婚問題を指している。関東大震災で妻園子が亡くなった後、二人の子どもを養育は、妹の塚本善子が助けていた。1929年の秋までに、塚本と皆川は結婚を決意するのだが、この結婚は実現しなかった。

ちょうどその時期に、塚本は内村から「独立」している。1929年10月、塚本虎二は内村の代講を務めながら、自身が主宰する聖書講演会を開始する。そして12月には、内村の助手を辞して完全に独立する。さらに、翌1930（昭和5）年1月には雑誌『聖書知識』を創刊し、東京・丸の内聖書講演会を主宰して、無教会伝道を展開していくのである。

この独立は、内村鑑三の勧めによるものであり、当初は内村集会の会員約300-400名のうち約半数が内村集会に出席した後に、同日の塚本の講演会に出席している。その意味では穏当な分離であったが、内村と塚本の間には、激しい感情的な行き違いが生じている。その直接の引き金は、1929年9月、山田鐵道という信徒が内村に送った意見書であった。山田は病氣療養中の内村に引退を勧め、あわせて講壇を塚本に譲るよう提言した。それに怒った内村が、山田夫妻に謹慎を命じるとともに、塚本に独立を迫ったのである²⁶。こうした経緯のなかで、内村と塚本の信頼関係は傷ついていた。

それと並行して、塚本と皆川の結婚問題が生じている。1929年11月3日、塚本が結婚の希望を内村に伝え、司式を依頼する（高木2009：119）。その結婚に内村が強く反対したのである。これにより、内村と塚本の関係は悪化することになる。実際には、塚本が独立した後、内村と塚本の双方が再会と和解を願っていた。だが、その願いは果されないまま、1930年3月28日に内村鑑三は亡くなっている。

その後、塚本と皆川は長く密接な協働関係にありながら、ついに結婚することはなかった。二人の結婚は、内村の反対と死の過程で凍結されてしまったようにみえる。この結婚問題について、清水三千恵は「余りにも純粋な信仰問題であったが、周囲はそれを理解するのに容易ではなかった」と語っている（清水1943：15）。塚本と皆川にとって、この結婚は「純粋な信仰問題」であったが、内村とその周囲の人びとには理解されなかった。そればかりか、塚本のスキャンダルとして語られていくことになる。

塚本虎二の「スキャンダル」——斎藤宗次郎『聴講五年』から

この時期の内村周辺の動向は、内村の言行録である『聴講五年』で知ることができる。著者の斎藤宗次郎は花巻非戦論事件で知られる内村の弟子であり、晩年の内村の数年間を身近で詳細に記録した。その記録からは、内村の周囲で塚本の結婚問題が醜聞（スキャンダル）

²⁵ 「信仰的に見れば、昭和四年十月塚本先生が独立伝道を始められる頃、とし子様の生涯を支配した所の問題が起つた」（清水1943：15）。

²⁶ 塚本の独立問題については、赤江達也（2023b）を参照。内村は、弟子たちのなかでもとりわけ塚本を寵愛していたが、先述のとおり、両者には緊張関係も存在していた。1928年には、塚本の過激な「教会主義」批判をめぐって、内村が原稿の修正を求めている（赤江2017b）。

として語られていたようすがうかがわれる²⁷。

1929年12月19日（木）、斎藤は向山堂書房の高山鍾吾（無教会信徒の経営者）を訪問している。高山によれば、その前日に内村が高山を呼びよせて、向山堂が塚本との関係を断たなければ、内村が向山堂との関係を断つ、と迫った。だが、この時点で塚本が元日付で創刊する新雑誌『聖書知識』は印刷中であり、その誌面には発売所として向山堂書房が記されていた²⁸。さらに高山は塚本の結婚問題について、斎藤に相談している。公表を恐れつつ高山が語った内容は、塚本や清水三千恵の説明とはかなり異なっている。

柏木の会員に皆川（とし子）という市川湧三氏校長の府立第一高女出、英学塾出身の丈低き廿五歳の婦人がある。何時の頃（今春頃か）か知らぬが、塚本先生の所に行って私は一生独身で暮らしますが、先生の所で二人のお子様をお世話させて頂きたいと申出した。／勿論先生に取っては意外のことであるから拒絶した。然し彼女は中々執拗な態度をつゞけるのであった。遂に愛し合う仲となったので矢張結婚するの得策なるを感じてか、其気になって先ず友人藤井武氏と吉原利貞氏に告げたが賛成であった。次に愈々内村先生に諮ったが大不賛成をせられた。此時塚本先生には内村先生に邪魔せられたと感じたらしい。／然し此事によって二人の関係は冷却するも離反するもせず依然として相愛の関係を持続し、殊に婦人の執拗なる行動は心あるものゝ目に余る様であった。

（斎藤2018：626-627）

ここでは、皆川の「執拗な態度」や「執拗なる行動」が強調されており、塚本がそれに押し切られて結婚を約するにいたったとされている。そして、内村の「大不賛成」を受けて、塚本は「邪魔せられたと感じたらしい」。高山が困惑したのは、内村門下の伝道者・藤井武の見解に関する食い違いであった。塚本は内村に対して、藤井武もこの結婚（再婚）に賛成していると伝えたが、藤井は内村に反対だと語った²⁹。さらに真偽は不明だが、塚本は高山に対して、内村への復讐を仄めかしたという。「内村先生が私の結婚を邪魔したから若し何時までも其態度を改めぬならば、今度は私も独立して自由の立場となり雑誌という発表機関も持つことゝなるから筆を以て先生の悪事を素破抜いてやる」（斎藤2018：628）。

²⁷ 斎藤は塚本の結婚問題などについて、それを書き残すことへの躊躇とともに、自身が書き残した記録の取り扱いへの配慮を求めている（斎藤2018：626）。その一方で、内村が語った「若き女」批判についても読み手に注意を促している（斎藤2018：671）。

²⁸ 『聖書知識』創刊号（1930年1月）の奥付によれば、発行所は聖書知識社（東京府駒澤新町）、印刷所は宮崎印刷所（東京芝区愛宕町）であり、発売所として向山堂書房（東京市麴町区九段坂）が記されている。なお、創刊号は1929年12月22日印刷納本、1月1日発行と記されており、12月19日にはすでに印刷中であったはずである。

²⁹ 高山によれば、「此点を見ると塚本さんが私に嘘を言ったか、藤井さんが内村先生に心ならぬ言を呈したのであるか其二つである」（斎藤2018：627）。なお、藤井武は強硬な再婚反対論者であり、塚本の再婚に賛成したとは考えにくい。

このような塚本の「醜態」が世間に知られないように、高山は塚本に苦言を呈する。

塚本さん ひどいではありませんか 白髪頭の男が廿五やそらの乙女子でもありますまい。見つともないですよ／とって醜態の世に知れるまでに至らぬ様苦言を呈しました。／二人は敢て疚しいことが無いと思うて居るらしい、何ととっても位置、使命、関係、影響を無視した無思慮の所為といわざるを得ない、困ったことが出来たものです。／人であるから止むを得ぬことであるが然し福音を伝える身分としては謹んで貰わねばならぬ。何しろ集会には紳士淑女も来て居るのだから若し之が知れ渡ったら外聞な話である。(斎藤2018 : 627)

ここで、高山は結婚問題についてかなり率直に語っている。問題は、塚本の「見つともない」「醜態」にある。「福音を伝える身分」であるにもかかわらず、その「位置、使命、関係、影響を無視した無思慮の所為」が、内村集会のなかの「紳士淑女」に伝わると「外聞」が悪い。このような高山の発言からは、1920年代末の無教会運動における二つの道德意識が浮かび上がってくる。内村や高山にとって、塚本と皆川の年齢差や関係は「外聞」が悪いものである。それに対して、塚本と皆川は「疚しいことが無いと思うて居る」。

年が明けて1930年1月1日、塚本の雑誌『聖書知識』が創刊される。1月上旬には、塚本は高山からの苦言を受け入れる³⁰。その内容は「若い婦人を近寄せない事」と「「無教会」という言を過激に用いざること」であった。このうち前者は、皆川と結婚しないことを含んでいたはずである。塚本の決断を聞いて内村は喜んだという。おそらくはこの決断によって、二人は結婚できなくなるのである。

内村鑑三の「悩み」

こうして、塚本と皆川の結婚問題はひとまず決着する。だが、その後も病床の内村は、塚本について悩んでいる。二ヶ月後の3月1日(土)、病床の内村は斎藤に対して「一つの深き悩みがあるのよ」と言い、「涙ながら震い声で」その悩みを語った。なお、斎藤はその発言を記録するにあたり、内村の発言が通常の状態とは異なることを示唆しつつ、誤解して躓かないように注記している³¹。

塚本君に悔改めて貰いたいということなのだ。四十を越えた塚本君が二十二三の娘子と

³⁰ 「塚本先生が高山さんの厳談を容れて、若い婦人を近寄せない事、「無教会」という言を過激に用いざることゝせられたのを内村先生がお聞きになって喜び且つ満足せられし様子であると」(1930年1月9日、斎藤2018 : 639)。

³¹ 「(先生の真意を解するは容易のことでない。余は此言葉を有のまゝ記録し置くが後に之を読む人あらば誤解し妄評し躓かんぬ様 糞 う)」(斎藤2018 : 671)。

結婚したいから承諾して式を挙げて呉れとの申込みだ。然も其女というは牛込か何処かの教会の女であって、二人の子の世話をしたいから住み込む事を許して貰いたいと言いだ出るほどの女だ。私には一回も来て話したことは無い。二時間も待って居って大久保で待ち合して一緒に帰るといふ始末だ。若し欠点でも探す気で見たら、何んな事があるかも知れない。こんな女と関係して居る事が悪いと思わぬのは、何という誘われたる心であろう。（斎藤2018：671-672）

内村もまた、皆川による誘惑から生じたスキャンダルとして捉えている。問題は結婚というよりは、結婚以前の二人のふるまいにあった。上の引用には、待ち合わせをして一緒に帰ることが挙げられているが、そのほか、軽井沢で自動車代100円を費やして二人で遊びまわったこと、塚本宅での婦人会の最中に密かに二人で書齋にいたことが語られている。「信仰だ、純愛だというものゝ何と醜い不心得な所為ではないか」というわけである³²。

ただし、その「不心得な所為」は、まだ内村の集会や世間に知られていない。だが、もし結婚を許して司式をしていたならば、その「醜い責任」を追うのは自分であり、「講演会は破れて仕舞う」。こんな「不純な関係を恥とも思はぬ人」を助手にしておくと「多年築き上げた基礎が傷く」。内村は、塚本のスキャンダルを、自分の責任問題として、また伝道事業の危機として捉えている。

内村にとって、塚本の結婚問題は、新宿・柏木の集会（聖書研究会）に生じていた「腐敗墮落」のあらわれであった。その前年（1929年）9月に内村が避暑地の沓掛（現在の中軽井沢）から柏木に戻ったとき、すぐに集会内の「腐敗墮落」に気がついた、という。

親しく其実状を見ると案の如く若き婦人の跋扈、信仰も誠実も無き若き女共の狂瀾怒涛は一大勢力の如くなって居るのであった。これは全く塚本なる人物の存在に伴う現象であることが疑われぬ事実であった。（斎藤2018：672）

内村は集会内に生じている「腐敗墮落」を「若き婦人の跋扈」「若き女共の狂瀾怒涛」と捉え、それが塚本の存在にともなう現象であるという「疑はれぬ事実」を見出す。内村は、塚本を慕う「若き女」たちが集会を「腐敗墮落」させたと考えている。

その危機的な事態への対処として、内村は塚本を「独立」させることを決断する。「柏木の信仰精神を如何せん」と一人祈り考えた結果、「事実を公にして責任を明かに」するので

³²「昨年〔1929年〕夏、信州に居る時、自動車代百円を費したというが、それは若き婦人等の訪問の為だというが実は例の女と二人で遊び回った為だという。昨年塚本君の家でモアブ婦人会のあった時、塚本君が女と二人で書齋に居たことを婦人会の誰も知らずに居ったが散会后二人が散歩に出たということを知ったという様な有様である。信仰だ、純愛だというものゝ何と醜い不心得な所為ではないか」（斎藤2018：674）。

はなく、「全責任を自ら負う」ことにして、「一切緘黙して静かに彼を安全に独立せしめん」と決断した、というのである。

先ず若き婦人の入会を見合わせると同時に柏木に本当の根を置かざる女の退会を促し置き次に幸、塚本君が齢も時機も独立するの時なるを以て断然独立自由を与うるの方法を執り会場の為にも五百円を給し全員をして直接間接に援助せしめ、出来る丈穩和の所置を取り塚本君の事実欠点の公にならぬ様に計り、自身は他よりの誤解や攻撃を甘んじて受くることにしたのである。(斎藤2018: 673)

独立する塚本のために、内村はさまざまな配慮と支援を行ったのだという。塚本のスキャンダルが公にならないようにしながら、誤解や攻撃を引き受けてきた。ところが、その「苦心」にもかかわらず、塚本は感謝すらしない、と内村は不満を漏らしている³³。

ここでの内村の批判は、塚本よりもむしろ「若き女」たちに向けられている。斎藤宗次郎も注意していたように、これらは病床で心身の衰弱した内村の発言であり、それ以前の内村にはみられない。ただ、「なぜ早くそんな関係を断って仕舞って正当な婦人を迎えることをしないのか」といった発言からは、「正当な婦人」との正当な結婚という道徳的基準があったことはうかがわれる(斎藤2018: 672)。

内村周辺の噂話

こうした内村の道徳意識は、無教会運動のなかでも、ある程度共有されていた。斎藤宗次郎の『聴講五年』には、内村の周囲で語られていた雑談も記録されている。そこでも塚本と皆川のことが否定的に語られていたことがわかる。

1930年3月4日(火)の昼、斎藤は柏木で石原兵永と「塚本先生事件」について語りあっている(斎藤2018: 681)。石原は、1月から塚本の後任として助手を務めていた。また、その日の夜には、二人の女性(菊江嬢、石原重成夫人)と斎藤が雑談するのだが、皆川とし子のことが話題に上る。

彼女(皆川とし子)は本郷の人 田島牧師より受洗せし牛込教会の信者。目下神経衰弱にて引込み居る由。両親心配し居るとのこと。／^{かつ}皆て大阪駅にて塚本先生は内村先生と別れ若き女四五名を連れ遊び廻って汽車時間の迫る時自動車にて帰り来たりし由。／九州えは岩永なる学生と共に行く。／市中何処えでも二人で歩く電車のある所でも必ず歩くという始末。(斎藤2018: 681)

³³「こんなにまで苦心されて居りながら、赤ん坊の手をねじって引き出した様に解して少しも好意を持たぬのは間違った態度と思う、宜しく主の御前に悔改めべきだ[ママ]」(斎藤2018: 674)。

ここでは、皆川が「神経衰弱で引込み居る」ので両親が心配していると語られる一方で、塚本と「若き女」たちとの交遊が噂される。大阪駅で同行の内村と別れて「若き女四五名」と遊びまわっていたこと、九州行きでは「岩永なる学生」（岩永恭）と同行したこと、東京市中のどこへでも皆川と二人で歩いて向かうこと。皆川の「神経衰弱」の原因の一端は、このような噂話が語られる状況にあったはずである。

こうした雑談のなかでは、皆川だけでなく、他の女性信徒たちの名前も挙げられている。3月5日（水）の夜、斎藤は柏木で鈴木虎秋から次のような話を聞く。

皆川、岩永、清水は三羽鳥 それに井上を加えて四天王か。／大久保駅 新宿等で塚本先生の柏木から帰るのを擁するという有様は実に妙な熱心なものであった。田村君と僕とは何時も気持悪くあった。ああした女の執拗なる心は我等には了解が出来ない。／湯澤君（健）などは婦人に関して三回程も塚本先生に強き質問をするのを聞いた。／昨年十二月でダンテ会を解散したのはよかった。／僕は先日直接会ってギリシヤ語の方を断って来たのはよかった。（斎藤2018：683）

塚本を取り巻く「若い女」として、皆川とし子、岩永恭、清水三千恵が「三羽鳥」と呼ばれ、さらに井上壽美を加えて「四天王」と呼ばれている³⁴。彼女らの「妙な熱心」や「執拗なる心」は、鈴木虎秋と田村次郎には「気持ち悪く」「了解が出来ない」ものであった。湯澤健はこうした「婦人」問題について三回ほど、塚本に「強き質問」をしたという。

皆川とし子の憂鬱

皆川とし子は引きこもって沈んでいた。1930年3月、塚本は「春が来た（或る友に）」と題して、「暗い顔」をした「友」を励ますエッセイを『聖書知識』に掲載している（塚本1930）。この「友」とは、皆川のことであった³⁵。

「主にありて愛する友よ、なぜそんなに暗い顔をしてゐるのか。なぜ首を上げないのか。めいり込んで、めいり込んで、一体どこまでめいり込まうといふのか。何故、いつまでも薄暗い室の中にとち籠つてゐるのか」。塚本はこのエッセイで、めいり込んだ「友」に対して「友よ、春が来たのだ」「なぜ陰鬱な室から飛び出さないのか。なぜ冬着をかなぐり棄てて大地に下り立たないのか」と励ます。そして、「死んだ人達に死んだ人の世話を願しようではないか。そして僕等はエス様の所に往つて、エス様の御仕事をしようではないか。仕事は多い、人生は短い」と結んでいる（塚本1930：表紙2）。

³⁴ 井上壽美の名前は、鶴田雅二編（1938）の執筆者名からの推定である。

³⁵ 塚本は皆川の没後に続編「永遠の春は来た（或る友に）」を書いており、そのなかで「友」が皆川を指していることを明かしている（塚本1943〔随筆〕：表紙2）。

このエッセイをふくむ第4号（4月号）が刊行される直前の3月28日、内村鑑三が死去している³⁶。その次の号にあたる『聖書知識』第5号を、塚本は「内村鑑三先生記念号」として刊行する。そのなかで、塚本は内村鑑三との関係について詳しく記している。それはいわば誌上での和解であった（赤江2022a）。

塚本はその後も、東京・丸の内は無教会最大の聖書講演会を主宰し続け、翌1931年からは『聖書知識』に新約聖書の翻訳を連載していく。無教会運動の一部では塚本への批判が語られていくのだが、塚本は明らかに「ポスト内村」時代の無教会運動を代表する伝道者であった。そして、その塚本の仕事を支えたのが皆川とし子である。

4 皆川とし子の仕事——語学教育と聖書翻訳 1930-1943

津田英学塾の教師時代——1930-1936

1930年3月、女子英学塾高等科を最優秀の成績で卒業した皆川は、女子英学塾の教師となる（1933年には津田英学塾と改称）。皆川は、教師として教育と宗教指導に務めた。また、英語の教科書『ツダ・イングリッシュ・リーダーズ（Tsuda English readers）』（三省堂）にも編集委員として参加した。1931（昭和6）年10月刊行の通称『ツダ・リーダー』は、その後の津田英学塾の英語教育を支えていく³⁷。

先述したように、津田英学塾長の星野あいや皆川の父親は、皆川に留学や高等教員受験を勧めた。ところが、皆川は「此の世的の一切の榮譽ある地位と、周囲の方々の御厚情を斥けて、^{ひたすら}只管より真実なる信仰の道を歩まれ、七年間津田英學塾に教へられる傍ら聖書の勉強にいそしまれた」（清水1943：14）。教職の傍らで「聖書の勉強」に励む姿勢は、官僚時代に聖書の勉強を続けた塚本と似ている。

皆川は、塚本の伝道事業を多方面で補佐した。月刊誌『聖書知識』（1930-1963）や『新約知識』（1937-1944）の編集・校閲、『聖書知識』に連載する新約聖書改訳の原稿作成、日曜日ごとの塚本の聖書講演の筆記と原稿化³⁸。これらが一つのサイクルを形成していた。そのほか、皆川は4-5人の信徒にギリシャ語を教えていた。

塚本によれば、皆川は講演の筆記や雑誌の校閲において、すぐれた能力を発揮した。

³⁶ 『聖書知識』第4号（1930年4月）の奥付によれば、3月29日印刷納本、4月1日発行である。

³⁷ 「〔ツダ・〕リーダー編集のために塾卒業生で女学校の英語教育に実地にたずさわっている方々を数名、委員にお願いしました。日下部嘉子さん、山口富喜さん、いまは亡き星野はなさん、皆川とし子さんその他多くの卒業生が委員として面倒な仕事を喜んでして下さいました。この方々のほかに西田琴子さん、三島すみ江さんなどもご協力くださいました」（星野1990：85）。『ツダ・リーダー』の収益は学校の経常費にも充てられ、塾の年間経常費の一割に達した（星野1990：86）。

³⁸ 「聖書知識誌、新約知識誌の仕事、聖書の改訳、塚本先生の日曜毎の講演筆記等をして居られた」（清水1943：15）。

早口で語尾の明瞭を欠く極めて筆記し難い話を殆んど速記のやうに、併し無くもがなの所が講演者自身にも気が付かぬやうに綺麗に省かれてゐて、何時も後で読んでみて立派な筆記ぶりに感嘆した。そして数百回に互る筆記中誤字脱字など一度もなく、ただ聞き間違ひが二三回あり、聞き落しが極めて稀にあつたことを記憶するだけである。確かに筆記の天才であつた。しかしただ天才といふだけでなく、講演者の信仰と心の動きとに同感する人にものみこれは可能であらう。（塚本1943〔弔辞〕：18）

皆川の校閲はあまりに緻密で、塚本が痼癢を起こすほどであつた。「殊にすぐれて緻密な頭脳は誤記誤植を殆んど皆無にしたばかりでなく、内容の不完全をも補正してくれた。余りの緻密さに筆者が痼癢を起し、「一度涙が出ねば校了にならぬ」といふ諺が出来たほどであつた」（塚本1943〔弔辞〕：18）。

皆川はその他の出版物の編集なども行っている。たとえば、塚本の協働者で医学博士の植木良佐が病気で亡くなると、その文集や追悼文集の編集実務にも携わつた³⁹。植木良佐は医者で、皆川家の主治医でもあつたが、1933年以降、聖書の研究に専念し、塚本とともに『旧約知識』（1934-1944）を発行していた（皆川1938、鶴田編1938）。

皆川はこれらの仕事を、津田英学塾での教師の仕事と並行して行っており、きわめて多忙だったはずである。そうした生活を送るなかで、1936（昭和11）年3月20日、父親が死去する。皆川に「限りなき愛と理解とを持たれた」父の死によって、皆川は「心に満たされない空虚を生じた」（清水1943：15）。

津田英学塾での教職と「福音の仕事」。その「二兎を追ふ事が何れにも不徹底不忠実である事を申訳なく思」つた皆川は、1936年10月に教職を辞する（清水1943：14）。こうして皆川は「信仰の道」に進み、「福音の仕事」に専心することになる。

新約聖書「口語訳」の共同作業——1930-1943

塚本虎二の雑誌『聖書知識』のメインコンテンツは、イエス伝研究と新約聖書翻訳であつた。このうち、新約聖書口語訳（試訳）は、1931年1月号から連載が開始され、1944年に完了している。当時は文語訳聖書が使用されており、口語訳聖書が次々と刊行されるのは1950年代である。塚本の口語訳はきわめて先駆的であつた（赤江2023a）。

この新約聖書「口語訳」プロジェクトは1930年に開始しているのだが、その当初から皆川は共訳者として従事している。共同作業では、まず塚本が訳したものを、皆川が「字引を引き英独の注解書を読みながら誤りを正し適切な訳語を探して整理」する。それを塚本が「赤インキを零したやうに直すと」、皆川が「綺麗に浄書して原稿を作」つた。さらに「彼女自

³⁹ 植木良佐は内村門下の「白雨会」出身の医師、聖書研究者である。1933年の夫人の死後、塚本とともに雑誌『旧約知識』を編集・発行するが、肋膜炎に罹り1936年10月15日に死去する。皆川は植木の文集と追悼文集を編集し、後者に寄稿している（塚本・鶴田編1937a、1937b、鶴田編1938）。

ら下書きをしてくれたものも大分ある」という（塚本1943〔弔辞〕：18）。

そうした共同作業の過程を示す原稿の写真がある（図1）。

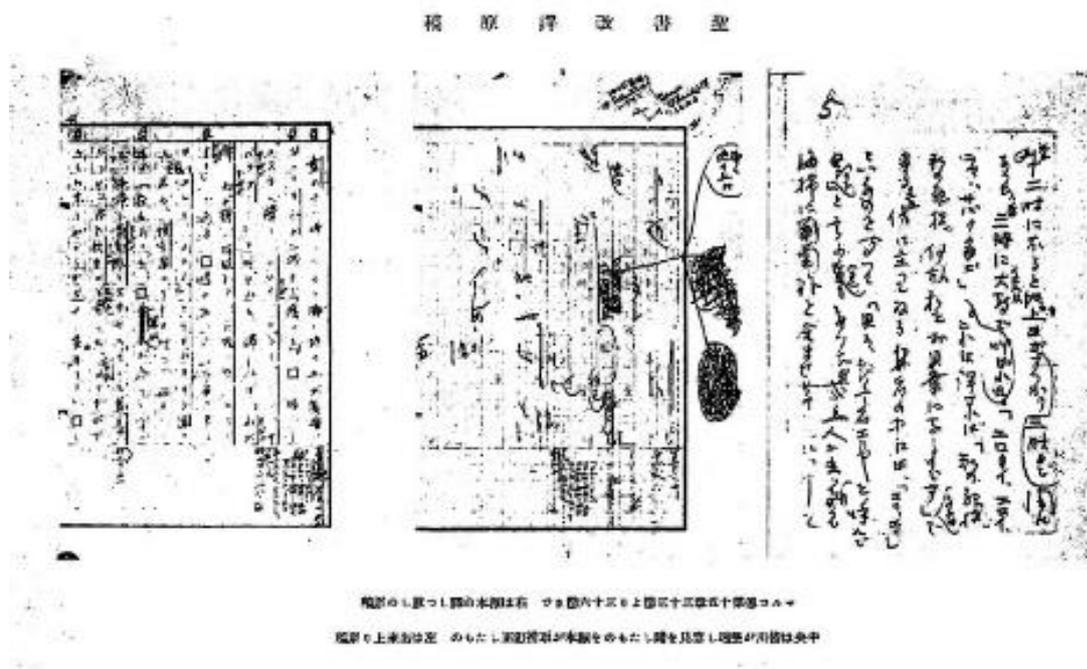


図1 聖書改訳原稿⁴⁰

これはマルコ伝（マルコ福音書）15章33節から36節の改訳原稿である。右の写真は、塚本が訳した原稿。中央は、その原稿を皆川が整理して意見を書き加え、さらに塚本が取捨・訂正したもの。それを皆川が清書すると、左の原稿ができあがる。

しかも、「これは原稿の一番綺麗な部分で、コロサイ書などときには訂正また訂正で、原稿紙の地が見えないほど」であった（塚本1943〔後記〕：33）。その共同作業を塚本と皆川は10年以上続けていく。皆川は「献身的努力」によって「この改訳に渾身の愛と力を注ぎ込んでゐた」（塚本1943〔弔辞〕：18-19）。

福音書異同一覧の作成——「ギリシヤ語の組の姉妹たち」

さらに皆川は福音書異同一覧の作成に没頭していた。これは新約聖書の四つの福音書（イエス伝）のうち、共通する記述の多い三つ（共観福音書）の異同を一覧表にしたものである。ギリシヤ語原文の異同に加え「^{バリエーション}比較的詳密な異文」も添付する点で、「多分外国にも類例があるまい」と塚本は自負している（塚本1943〔弔辞〕：19）。

この福音書異同一覧のプロジェクトは、もともとは塚本が1919（大正8）年に着手したも

⁴⁰ 出典は「口絵 聖書改訳原稿」『聖書知識』第160号（1943年4月）。写真の下には、「マルコ伝第十五章三十三節より三十六節まで 右は塚本の訳し放しの原稿／中央は皆川が整理し意見を付したものを塚本が取捨訂正したもの 左は出来上り原稿」と記されている。

のであった。官を辞して聖書研究に専念しはじめたとき、「初めの三つの福音書を比較対照する一覽なしには、研究が不可能的に困難であることを知り、国内の先行する書物にも不便を感じ、「Burton and Goodspeed, A Harmony of the Synoptic Gospels in Greek (1920) に案を得、これを改善したものを自分で作らうと決心した」(塚本1951: 序)。

塚本は三年かけて、自分の書齋用の一覽を作成する。この一覽作成を通じて「静的、平面的であつたイエスの姿が、動的となり立体的となつた」。それは塚本にとって「信仰上の革命」となり、その後の塚本の聖書研究を方向づけることになる。

関東大震災後には、この一覽を「祖国の教友達に献じようといふ心」が起こる。世界的に有名で、もっとも学術的なHuck, Synopse der Drei Ersten Evangelienによってつくりなおそうとした。ところが、「完全癖」のために「ただ漫然邦訳を並べるだけで満足ができず、ギリシヤ語原典により一句々々語々々を対照することにした為、想像も及ばぬ面倒な仕事になつてしまった」(塚本1951: 序)。

塚本はその「あまりの面倒さに、幾度か後悔し、幾度かこの企てを放棄しようとした」。そのときに支えてくれたのが、「ギリシヤ語の組」の婦人たちであった。

ただ同胞クリスチャンに対する愛と、この仕事を助けてくれた数名の婦人たちの熱心が著者を支へた。この婦人達は著者のギリシヤ語の組の会員である。ことにその内の一人、皆川とし子は、最も面倒な最後の仕上げを受持つてこれを完成してくれた〔……〕。

(塚本1951: 序)

1930年代には「数人のギリシヤ語の組の姉妹たち」が異同一覽の「整理」を進めた。その一人が皆川とし子であるが、おそらく1940年頃からは、皆川が独力でこの「面倒な仕事」に取り組むようになる。1942(昭和17)年頃には、皆川の働きぶりは「傍目も恐しいやうであつた」。この異同一覽についても、塚本は皆川的能力を高く評価し、賞賛している。

殊に異文の整理は言語に絶する複雑面倒なもので、私は今更の如く彼女の明敏なる頭脳に驚嘆した。実際福音書の異文に就て彼女ほどの知識をもつ者は多分我が国に多くあるまいと思ふ。(塚本1943〔弔辞〕: 19)

病と煩悶

1942年、夏の終わり頃、病弱な皆川はついに健康を害する。「頭の^{しん}芯が痛いと言ひ出したので、彼女の健康を気遣ふと同時に、過度の仕事への熱中がその信仰の病的徴候であるとして彼女を仕事から引離さうと試みた」(塚本1943〔弔辞〕: 19)。しかし、皆川は容易には受け入れず、病氣と不眠に悩み、仕事ができないことに苦しんだ。

塚本によれば、皆川は「福音のための仕事」に執着していた。それはもはや「彼女の心の

唯一つの安住所であり、生存の理由であつた」。皆川は「家を棄て友人を棄て凡てを棄てて、福音のための仕事だけを、その孤独なる心のただ一つの隠れ場、希望また生命として十数年を過したのである」（塚本1943〔弔辞〕：19-20）。病に苦しむなかで、皆川は信仰的にも深刻に煩悶している。

繊細敏感なる彼女は悩みに悩んだ。そしてそれがもはや仕事に対する未練でなく、神に凡てを任せ得ざる悩みとなり、遂に信仰とは何ぞや、神に任せるとは何ぞやといふ純信仰問題にまで突入し、一体自分のやうな罪深い者が神様の仕事をして来たのは間違ひではなかつたか、といふ深刻な煩悶までするやうになつた。それに体の衰弱も手伝つて、苦悶と不眠の日が続いた。併し私は一抹の不安を残しながらもその勝利を信じた。そして信仰問題の解決する瞬間に凡ての暗雲が去り、健康も亦立所に回復することを信じて祈つてゐた。（塚本1943〔弔辞〕：20）

皆川はそれでも塚本の聖書講演の筆記は続けていたのだが、1943年1月10日、丸の内集会での塚本の講義「完勝の道」の最後に休止する。このように仕事ができなくなっていくことが、皆川をさらに苦しめた。

1943年2月16日、皆川から塚本に宛てて信仰の悩みを綴った手紙がとどく。塚本はめずらしく長い返事を書き、18日に皆川から返信がとどく。これが最後の手紙となる。21日に塚本は皆川家を訪問して、とし子とその母親と三人で二時間あまり話しあう。塚本は皆川が快復しつつあり、日曜には丸の内の集会で会えるかもしれないと考えていた。

皆川から塚本に宛てた最後の手紙では、苦悩の吐露、塚本の仕事の進捗にかんする気遣いとともに、十数年間「血のにじむやうな辛い我慢を」してきた異同一覧への強いこだわりが記されている。

昨日は久しぶりに気が向いてシノプシス（異同一覧のこと 編者注）をひろげてみました 血のにじむやうな辛い我慢を——そしてこれは十数年来何にささへられてか黙つて我慢しつゞけて来たこととございしましたが——思ひ出して身の毛のよだつ思ひもしますけれどもやつぱり手がけただけあつて殊に打込んだVar.（異文のこと 編者注）など可愛くてどうしても放り出してしまへないのでございます Var.の本など調べるとよくわかるので仮病かしらなども時々考へます⁴¹

皆川とし子の苦悩は、聖書の翻訳・研究という仕事へと向かう原動力になっている。女性信徒が煩悶し求道するなかで、信仰的な営みとして学術的な活動へと向かっていくという点

⁴¹ 皆川とし子の塚本虎二宛書簡（1943年2月18日付）（塚本1943〔弔辞〕：22からの重引）。

に、無教会の特徴をみてとることができる。この点は、後で〈信仰＝研究〉系キリスト教という観点から論じてみたい。

皆川とし子の死

2月22、23日頃、皆川は風邪気味となり、25日には肺炎の徴候があらわれる⁴²。28日に昏睡状態となり、3月1日の夜10時40分に没する。36歳（数えて38歳）であった。「夜十一時、来るべきものが遂に来た。噫！ 福音の為に冷い涙を流しつつ二十年近く茨の道を歩いてくれた彼女の生涯を憶うて、眠れなかつた。ただ祈つた」（塚本1943〔日記〕：28）。

翌日、雑司ヶ谷の皆川家を訪ねた塚本は、皆川の平和な死顔をみて安堵する。「とし子さんはにこやかに眠つてゐた。多くの死顔を見たが、こんなに平和な微笑をたたへた顔を見たことがない。最近あんなに信仰問題で苦闘してみた彼女が、と思ふと不思議である。大丈夫難関を突破し得るとは信じながら、なほ一抹の不安があつたが、この笑顔を見てすっかり安心した」（塚本1943〔日記〕：28）

3月4日（木）に、告別式が行われた。会場は東京・神田駿河台の基督教女子青年会講堂である。告別式の通知状はほとんど未着であったが、約150人が参列した。

午後二時から神田区駿河台基督教女子青年会講堂に於て皆川とし子の葬儀を行つた。平井淑子さんのフューネラル・マーチの前奏を聴きながら、真一文字に信仰の道を歩かんとする者の生涯の余りに苦難多きを思ひ、涙のはふり落ちるのを禁じ得なかつた。そして福音の為私の仕事の下積になつて斃れた彼女に対する感謝と申訳なさが私を圧倒した。実際彼女なくして私の『聖書知識』も聖書改訳もなかつたであらう〔。〕（塚本1943〔日記〕：29）

翌月の雑誌『聖書知識』第160号（1943年4月）は「皆川とし子記念号」として刊行され、数篇の関連記事が掲載された。友人・清水三千恵による皆川の経歴は、「豊かな天分と良き環境とに恵まれ、すくよかにお育ちになつたとし子様は、生きた信仰と鋭き良心の故に、余人の付度を許さざる苦難に満ちた御生涯を、稀にみる美はしい死を以て冠し、いみじくも栄光を神に帰せられたのである」と結ばれている（清水1943：15）。

塚本による弔辞は、皆川の「信仰生涯」、とくに「最後の信仰的苦闘」を詳しく紹介した上で、「キリストの生涯」との類似を指摘している。

斯く思ふ時、私達は最早彼女の死を悲しみ嘆かない。却つてその死様を喜び感謝する。それは多く類例を見ない最も偉大なる死であり、キリストの死に似通ふからである。従

⁴² 皆川の主治医は、妹の夫で医学博士の藤田眞之助であった（清水1943：15）。

つて極めて多難であり涙多き彼女の生涯も、高き意味に於ては最も神に恵まれた、幸福な、理想的の一生であつた。若し苦難の全生涯を以て従順を学び給ふたキリストの生涯が人類の理想であるならば、同じく苦難を以て従順を学びその最後の瞬間に於て従順の絶対境にまで登りつめた彼女の生涯も亦、特に神に愛さるる者の理想的生涯と言ふべきである。何人もこれ以上の生涯を生き、これ以上の死を死ぬることは出来ない。（塚本1943〔弔辞〕：24-25）

仕事の継続——新約聖書翻訳、福音書異同一覧のその後

皆川の死によって、塚本は頓挫したかにみえる。「私の仕事自身は、彼女をもぎ取られて一大頓挫を来した。今のところどうしてよいか案が立たない。特に異同一覧と改訳は、まだこれ続ける気も元気もない」（塚本1943〔弔辞〕：25）。

しかし、実際には、塚本は休むことなく『聖書知識』を刊行していく。皆川との共同作業である新約聖書翻訳はその「九割以上」が終わっており、「新約二百六十章中十八章を残すだけ」であった。福音書の異同一覧にいたっては「最後のページの打合せが残つてみただけ」であった（塚本1943〔弔辞〕：18、25）。

○改訳も異同一覧も一頓挫したが、彼女の召されたのが御意である以上、「エホバ・エレ」を信じて疑はないばかりか、よりよくより早く完成するであらうことを信ずる。兎に角来月号から改訳を続ける。異同一覧もこんなことで後れおくれになつたが、出来るだけ早く陣容を建直したいと思ふ。（塚本1943〔後記〕：33）

その言葉どおり、塚本は「陣容」を建て直し、仕事を継続する。『聖書知識』での新約聖書の翻訳連載は、翌1944（昭和19）年にひとまず完結する。『福音書異同一覧』は、驚くべきことに、戦時下の1944年10月に印刷を開始している。だが、その一部が翌1945（昭和20）年の空襲で焼失してしまう。その校正刷を護ったのも、女性協働者の小杉信得であった。

ただ校正刷だけはこの仕事のためわざわざ同活版所〔一色活版所〕に入った小杉信得嬢が、そこの金庫を信頼せず毎日肌身はなさず持つてゐてくれた為、自宅を焼かれながらもこれを救つてくれた。（塚本1951：序）

こうして、1951（昭和26）年に『福音書異同一覧』はついに刊行される。新約聖書の口語訳については、塚本は戦後も改訳を続け、1950年代以降に順次刊行していく（赤江2023a）。それらの書物に塚本が記した謝辞を通して、私たちは「皆川とし子」という名前にふれることになるのである。

5 おわりに——女性協働者からみた無教会運動

無教會的信仰実践としての聖書研究——集団的な研究＝出版活動

内村鑑三の没後、1930年代の無教会運動では、十数人の伝道者が各地で活動を展開している。その無教会ネットワークにおける主要な結節点となるのが、東京の塚本虎二と大阪の黒崎幸吉である。そして、塚本虎二の伝道事業を補佐したのが皆川とし子であった。

皆川とし子は1930年から塚本とともに新約聖書の口語訳に従事し、福音書異同一覧の作成に没頭していく。皆川は健康を害し、信仰的に煩悶しながら、聖書の研究を続けようとした。このような皆川の研究への没入は、皆川の資質や個別的事情だけではなく、無教会運動における〈信仰〉と〈研究〉をつなぐ回路に支えられていた。

内村鑑三の無教会伝道は、1900年の開始当初から民間学的な性格をもっていた⁴³。『聖書之研究』という誌名や「聖書講義」「聖書研究会」といった用語法にみられるように、内村は学術的・学校的な用語を使いながら信仰共同体を形成した。無教会信徒たちは毎月届けられる『聖書之研究』を読み、東京の信徒は毎週日曜に内村の「聖書講義」に出席した。こうして無教会信徒たちは、内村鑑三の聖書研究を基調とした信仰生活を送る。無教会運動は当初から〈信仰＝研究〉系キリスト教と呼びうるような傾向を持っていたのである。

1920年代になると、教養主義的な読者・聴衆の増加とともに、無教会運動の裾野が拡大する。大正期に登場した新中間層が「宗教的教養」への関心から内村鑑三の書物・雑誌・講演などを經由して内村の聖書講義へと参入してくるのである⁴⁴。1920年代後半には、助手の塚本虎二が新たに参加した信徒たちの支持を集めた。内村と塚本の葛藤は、教養主義者を魅了しながらも教養主義を批判した内村と、教養主義に親和的な塚本の対立でもあった。

とくに1925年に塚本虎二が開始した「ギリシヤ語聖書研究会（ギリシヤ語の組）」は、内村門下における聖書研究のあり方を変える。無教会信徒の間に、聖書を原語で学ぶ活動が広がるのである。そのなかには、女性の信徒も数多くふくまれており、皆川のように教える側へとまわる者もいた。内村の弟子や助手には一高・帝大出身の男性が多いのだが、1920年代以降、皆川とし子のように高等教育を受けた女性信徒が登場するのである。

無教会運動では、聖書研究は主要な信仰の実践であった。その特徴のひとつは、集団的な活動という点にある。一般に、無教会の聖書研究は、塚本虎二や黒崎幸吉のような伝道者＝個人の仕事として考えられやすい。だが、それは同時に、男性伝道者のほかにも男女の協働者たちが継続的に関与する集団的な活動であった。無教会の聖書研究には、集団性と個人性の両面がある。皆川とし子にとって、聖書翻訳や福音書異同一覧の作成は、個人的かつ信仰

⁴³ 内村の伝道の民間学的な性格は、赤江達也（2023a、2024）で指摘した。無教会の「知識人宗教」「読者宗教」的な性格については、赤江達也（2013：終章）を参照。

⁴⁴ 無教会キリスト教と「宗教的教養」については、赤江達也（2024）で論じた。大正期の修養・教養については、大澤絢子（2022）を参照。

的な使命となっていくが、基本的には、塚本や他の信徒との共同の仕事であった。

もうひとつの特徴は、出版活動である。塚本と皆川による新約聖書翻訳は、毎月発行される『聖書知識』に連載された。また、塚本と協働者たちの聖書研究の成果は、『聖書知識』のほか、『新約知識』や『旧約知識』などで発表された。内村の『聖書之研究』と同様に、塚本の『聖書知識』も数千規模の定期購読者をもっていた。ただし、その読者たちは『聖書知識』に連載される新約聖書翻訳を、塚本と皆川の共訳ではなく、塚本の個人訳として受け取っていたはずである。

なお、塚本の門下からは、関根正雄や前田護郎のように、ヨーロッパに留学して博士号を取得し、現地で講師を務める者もいた。戦時期には、ヨーロッパから届く彼らの手紙が『聖書知識』に掲載されている。そして1950年代には、関根正雄（東京教育大学）、前田護郎（東京大学）、中沢洽樹（立教大学）ら塚本虎二門下出身の聖書学者が各大学に着任し、戦後日本のアカデミズムにおける聖書学を形成していくことになる（赤江2023a）。

女性信徒たちの活動空間の拡大——塚本集会の特異性

無教会運動における女性の「助手」は、内村鑑三ではなく、無教会第二世代のもとで登場してくる。そのなかでも、塚本虎二の丸の内集会は、女性協働者たちの数と活動の内容の双方において際立っていた⁴⁵。

もちろん内村鑑三の伝道事業においても、当初から夫人・内村静子や早世する長女・内村ルツ子、そして女性信徒たちが実務を中心に重要な役割を担っていた。内村は基本的には女性の教育に積極的であり、若い女中には通学を勧めている（高木編2008）。ただ、内村には女性の高等教育については消極的なところがあった。塚本の「ギリシヤ語の組」についても内村は支援しつつ、やや距離をとっていた。

それに対して、塚本虎二の伝道事業では、10数名の女性協働者たちが主要な役割を担っていた（高木2009：81-83）。塚本は大正期に拡大する女性の高等教育や女性の自由な活動を肯定し、男女の隔てなく聖書や語学を教えた。そして、そのなかから聖書の翻訳・研究にも従事する者が輩出される。女性協働者たちによる伝道と研究という点で、塚本集会は無教会史において、そして日本プロテスタント史においても特筆すべき事例なのである。

塚本虎二は1929年から30年にかけて、女性信徒との関係について内村や他の信徒から批判されていたが、そのことは塚本の姿勢とも関係している。塚本は、女子青年たちの煩悶や求道から積極的に学び、女性たちからの影響を公言した。女性信徒と親しく対話・交流する塚本の姿勢は、内村や他の弟子・信徒たちにあまり理解されなかつただけでなく、潜在的なスキャンダル（女性問題）とみなされた。そしてそうした否定的な語りも、1970年代の大河原

⁴⁵ 無教会の女性協働者としては、皆川とし子のほかにも、矢内原忠雄の助手・速記者を務めた靱山民子がいる。靱山民子については、赤江達也（2017a）、赤江達也・岩野祐介・黒岩康博（2024）を参照。

礼三の議論——および藤田若雄を中心とする共同研究（藤田編1977a、1977b）——にも継承され、戦後の無教会研究のなかで通説化するのである。

大河原礼三は、塚本虎二のキリスト教は「日本的＝母性宗教的に変質したキリスト教」であると批判した（大河原1977：132）。そして、塚本は「神との関係」のみを重視して「社会関係を無視する立場」を取っていると指摘する（大河原1977：124-125）。だが、大河原が想定する「社会関係」では「男性的」な主体や信仰こそが標準的なものであり、そこから逸脱する塚本の「女のような」性格や信仰は否定的に論じられる。

こうした議論には、無教会は「男性的」なキリスト教であるべきだ、という前提がふくまれている。男性の伝道者と信徒を中心に語られてきた無教会史では、女性信徒の位置や役割は周縁化され、塚本虎二が女性信徒たちの活動空間を拡大したことは軽視されてきた。それに対して、皆川とし子をはじめとする塚本集会の女性信徒たちに注目することによって、無教会運動における男女の分業と協働という研究課題が浮かび上がってくるのである。

女性協働者たちの困難

最後に、皆川とし子の事例を通して、無教会運動における女性協働者たちにとっての困難について考えておきたい。皆川とし子は聖書の翻訳・研究に従事するなかで、さまざまな社会的制約や限界に直面している。

まず、『聖書知識』に掲載される新約聖書翻訳は、塚本と皆川の共訳ではなく、塚本の単独訳として発表された。皆川とし子は、多言語を習得して新約聖書の翻訳と文献学的な研究に従事した。当時の日本の聖書学で、福音書の異本を比較検討していた研究者は、それほど多くなかった。だが、当時の慣習では、皆川の仕事は、塚本虎二の名で公表されるのであり、皆川とし子の業績としては捉えられなかった⁴⁶。

また、女性協働者の将来的な展望（出口あるいは行く先）の問題があった。たとえ皆川の業績と能力が認められたとしても、塚本の助手の先に、皆川の仕事を想像することはむずかしい。皆川は津田英学塾の教師を続けることができたが、その道を断って「信仰の道」に進む。しかしその当時は、無教会伝道者は男性の仕事だとみなされていた。そして、大学や神学校の教職は女性にはいまだ開かれていない。

1942年に健康を害した皆川とし子は、仕事ができないことに苦悩する。その煩悶は、健康問題や結婚問題とともに、女性による伝道と研究活動の問題としても考えた方がよい。皆川の煩悶の背景には、研究する女性を取り巻く閉塞状況がある。皆川とし子の場合、家族の理

⁴⁶ 塚本は「皆川とし子記念号」で、皆川の仕事の大きさに言及しながら、それが自分の「功績」となることへの違和感を記している。「創刊当時より本誌の為に働いてくれて、その下積みとなって遂に斃れた皆川とし子さんに本号を献げ、その天上の霊に感謝の意を表することは読者諸君も諒とされるであらう。一将功成りて万骨枯ると言つては大袈裟に過ぎるが、私だけが樂をし感謝の横取りをして、多くの人の功績が隠れることは申訳なくまた辛い」（塚本1943〔後記〕：33）。ただ、塚本は、そのような慣習を変えられたわけではなかった。塚本はその後も折に触れて、皆川への謝辞を記している。

解があり、信仰上の先生の理解があり、しかし戦時下の日本社会では職業的な出口はない。それゆえに皆川は、塚本に過度に依存せざるをえない位置に置かれていた。皆川とし子の困難は、戦時下に学校外で研究する女性の困難であり、無教会における女性協働者の地位の不安定さの問題でもある。

そうした困難は、他の女性信徒にも共通している。1930年代に数人の女性信徒が取り組んでいた福音書異同一覧の作成プロジェクトは、1940（昭和15）年頃には皆川が独力で進めるようになっていく。なぜ、他の女性信徒たちはこのプロジェクトから離れたのか。家族の理解という点だけでも、戦時下に女性信徒が学校外で聖書の研究を継続することの難しさは明らかである。そして、そのなかで仕事を続けた皆川の孤独と困難が浮かび上がってくる。

煩悶する皆川に対して、塚本は信仰上の先生としてその「信仰問題」に応答する。それは伝道者としては当然のことである。だが、皆川の仕事への「執着」を戒めながら、ときに叱責する塚本の指導は、皆川が直面していた社会的な困難を変化させるわけではなく、信仰上の先生（塚本自身）への依存を維持・強化しているようにもみえる。

皆川とし子のような女性信徒の信仰的な研究活動は、学校の外、教会の外で展開されるがゆえに、学問史からも教会史からもこぼれおちてしまう。そしてそれは無教会史のなかでも重視されてきたとはいえない。皆川とし子をはじめとする女性協働者、そして女性信徒たちについて、さらに調査を進める必要がある⁴⁷。

こうした女性信徒の研究は、たんに無教会史の隙間を埋める作業なのではない。無教会信徒の過半数を占める女性信徒たちは、無教会運動のなかでさまざまな役割を担ってきた。にもかかわらず、無教会は「男性的」なキリスト教であるという規範的な理解によって、女性信徒の存在と活動は見えにくくなっていた。無教会運動を担っていた女性信徒たちの姿を描き出すことによって初めて、無教会運動の全体像を更新することができるのである。

付記

本研究は、JSPS科研費 JP23K00080の助成を受けたものであり、大澤絢子氏（東北大学）との共同研究「大正期の宗教的教養と女性たち——「メディア宗教」のジェンダー史的研究」の成果である。本論文は「アジア・キリスト教・多元性」研究会（第209回、2022年11月26日）での報告の後半部をもとに作成した⁴⁸。また、史料データセッション研究会（第2期第18回、2023年2月12日）では、皆川とし子関連資料を検討していただいた。斎藤宗次郎『聴講五年』の読解については、岩野祐介氏（関西学院大学）、麻生将氏（二松学舎大学）から助力を得ている。記して感謝申し上げます。

⁴⁷ 塚本訳聖書は戦後に継続的に刊行され、2010年代にも三種類の塚本訳聖書が刊行されているが、それらを主に担ったのも女性協働者たちであった（赤江2023a）。

⁴⁸ 同報告の前半部は、赤江達也（2023b）として発表した。

参考文献

- * 著者名（名字）のアルファベット順、同著者については出版年順で配列している。
- * 雑誌『聖書知識』第160号（1943年4月）における塚本虎二の文章の出典は（塚本1943〔弔辞〕）等と表記している。
- 赤江達也 2013 『「紙上の教会」と日本近代——無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店
- 2017a 『矢内原忠雄——戦争と知識人の使命』（岩波新書）岩波書店
- 2017b 「無教会キリスト教における融和の思想——内村鑑三と塚本虎二の無教会主義論争」『史潮』第82号
- 2019 「無教会キリスト者の「戦争」——矢内原事件と塚本虎二の逡巡」戦争社会学研究会編『戦争社会学研究3——宗教からみる戦争』みずき書林
- 2020a 「塚本虎二から考える——平和主義・愛国主義・戦争責任」『内村鑑三研究』第53号
- 2020b 「無教会キリスト教とナショナリズム——南原繁から考える」『思想』第1160号
- 2021 「キリスト教会の外へ」（第4章）島菌進・末木文美士・大谷栄一・西村明編『シリーズ近代日本宗教史2 国家と信仰——明治後期』春秋社
- 2022a 「「無教会主義」の波紋——内村鑑三から塚本虎二へ」『現代と親鸞』第46号
- 2022b 「内村鑑三と「二つのJ」——キリスト教ナショナリズムの系譜」『思想』第1179号
- 2023a 「新約聖書を語りなおす——塚本虎二による口語訳プロジェクト」関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『ことばの力——キリスト教史・神学・スピリチュアリティ』キリスト新聞社
- 2023b 「内村鑑三と塚本虎二はなぜ分離したのか——宗教思想運動における継承の問題」『アジア・キリスト教・多元性』第21号
- 2024 「近代日本のキリスト教知識人——内村鑑三の無教会主義と宗教的教養の時代」（第7章）姜尚中総監修『アジア人物史9——激動の国家建設』集英社
- 赤江達也・岩野祐介・黒岩康博 2024 「〈史料紹介〉矢内原忠雄の橘新宛書簡——無教会伝道者から地方の信徒への手紙」『関西学院大学社会学部紀要』第142号
- 安芸基雄 1997 『晩年の内村鑑三』岩波書店
- カルダローラ、カルロ（Caldarola, Carlo）、田村光三・石井勉・谷清・渋谷浩・石倉啓一訳 1971=1978 『内村鑑三と無教会——宗教社会学的研究』新教出版社
- 藤田若雄編 1977a 『内村鑑三を継承した人々（上）——敗戦の神義論』木鐸社
- 編 1977b 『内村鑑三を継承した人々（下）——十五年戦争と無教会二代目』木鐸社
- 古川 安 2022 『津田梅子——科学への道、大学の夢』東京大学出版会

- 原島圭二 1977「第二篇 総論 (二) 戦争と平和」藤田若雄編『内村鑑三を継承した人々 (下)』木鐸社
- 平石典子 2012『煩悶青年と女学生の文学誌——「西洋」を読み替えて』新曜社
- 星野あい 1990『小伝(伝記・星野あい)』(伝記叢書79)大空社
- 今高義也 2020『内村鑑三の世界像——伝統・信仰・詩歌』ペリかん社
- 石原兵永 1972『身近に接した内村鑑三(下)』山本書店
- 川又俊則 2002『ライフヒストリー研究の基礎——個人の「語り」にみる現代日本のキリスト教』創風社
- 2003「牧師にならなかった〈牧師夫人〉——妻・母・教会内外の役割と葛藤」桜井厚編『ライフストーリーとジェンダー』せりか書房
- 2006「キリスト教会を継ぐ者の語り——〈牧師夫人〉の母から娘へ」(第4章)川又俊則・寺田喜朗・武井順介編『ライフヒストリーの宗教社会学——紡がれる信仰と人生』ハーベスト社
- 川村清志 2011『クリスチャン女性の生活史——「琴」が歩んだ日本の近・現代』青弓社
- 小檜山ルイ 2023『明治の「新しい女」——佐々城豊寿と娘・信子』勁草書房
- 小山静子 2023『高等女学校と女性の近代』勁草書房
- 皆川とし〔とし子〕 1938「私のお医者様」鶴田雅二編『植木良佐君』植木良佐文集刊行会
- 無教会史研究会編 1991、1993、1995、2002『無教会史(I・II・III・IV)』新教出版社
- マリNZ、マーク・R. (Mullins, Mark R.)、高崎恵訳 1998=2005『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』トランスビュー
- 中本かほる 2018「YWCAによる女子青年教育の研究——1920～30年代の東京YWCAの事業を中心に」2017年度 東洋大学博士論文、2018年3月25日
- 日本YWCA100年史編纂委員会編 2005a『日本YWCA100年史』日本キリスト教女子青年会
- 編 2005b『日本YWCA100年史 年表 1905-2005』日本キリスト教女子青年会
- 日本基督教聯盟編 1926『基督教年鑑(昭和2年)』日本基督教聯盟年鑑部
- 大河原礼三 1977「第三篇 各論 (二) 塚本虎二」藤田若雄編『内村鑑三を継承した人々 (下)』木鐸社
- 大村喜吉 1960『斎藤秀三郎伝——その生涯と業績』吾妻書房
- 1964「斎藤秀三郎伝——補遺」『日本英学史研究会研究報告』第3号
- 大澤絢子 2022『「修養」の日本近代——自分磨きの150年をたどる』(NHKブックス)NHK出版
- 斎藤茂 1959「塚本先生のはたらき」関根正雄・前田護郎・斎藤茂編『聖書とその周辺』伊藤節書房
- 斎藤宗次郎、田村眞生子監修、児玉実英・岩野祐介編 2018『復刻 聴講五年——晩年の内村鑑

三に接して』教文館

- 関根正雄・前田護郎・斎藤茂編 1959『聖書とその周辺——塚本虎二先生信仰五十年記念論文集』伊藤節書房
- 清水三千恵 1943「皆川とし子様略歴」『聖書知識』第160号、1943年4月
- 高木謙次 2009『高木謙次選集3——塚本虎二・黒崎幸吉と三人の学者』キリスト教図書出版社
- 高木謙次編 2008『内村鑑三の弟子 田中龍夫・梅子——遺文と回想』キリスト教図書出版社
- 塚本虎二 1926「神の国は受くべきものなり」『聖書之研究』第314号、1926年9月
- 1930「春が来た（或る友に）」『聖書知識』第4号、1930年4月。
- 1943〔随筆〕「永遠の春は来た（或る友に）」『聖書知識』第160号、1943年4月
- 1943〔弔辞〕「皆川とし子を葬る辞」『聖書知識』第160号、1943年4月
- 1943〔日記〕「雑感雑録」『聖書知識』第160号、1943年4月
- 1943〔後記〕「皆川とし子記念号」『聖書知識』第160号、1943年4月
- 1951『福音書異同一覧』羽田書店〔のち伊藤節書店、新地書房〕
- 塚本虎二訳 1963『新約聖書 福音書』（岩波文庫）岩波書店
- 塚本虎二・鶴田雅二編 1937a、1937b『植木良佐文集（上・下）』植木良佐文集刊行会
- 鶴田雅二編 1938『植木良佐君』植木良佐文集刊行会
- 内村鑑三 1927「日々の生涯〔1927年8月2日〕」『聖書之研究』第326号、1927年9月→1983『内村鑑三全集35——日記三』岩波書店
- 和崎光太郎 2017『明治の〈青年〉——立志・修養・煩悶』ミネルヴァ書房
- 矢田部千佳子 2020「内村鑑三と3人の娘たち」『DEREK』第40号
- 2024『愛に祈る人——無教会キリスト教伝道者 寶田愛子の生涯』教文館

（あかえ・たつや 関西学院大学教授）